



豫州安西往生記

全



法名釋速成信士

總譽安西法師往生記

安西法師生緣ハ豫列宇和郡真浦乃入リテ其家  
常リ。漢を業とシ。されども天性柔和アリ。志も  
孝養乃誠あり。父母為其妻をひテ猶を其が産業  
を。勵まん事。汝計るもいふも。彼心中。一度ハ出家  
此望あるゆへ。此一月ハ隨をひて。程ある中  
。十九リテ父を亡ひ。三十四あり母もを去る。然も  
ども。十一年の六の月。世乃な。り。ま。を。う。つ。し。ま。





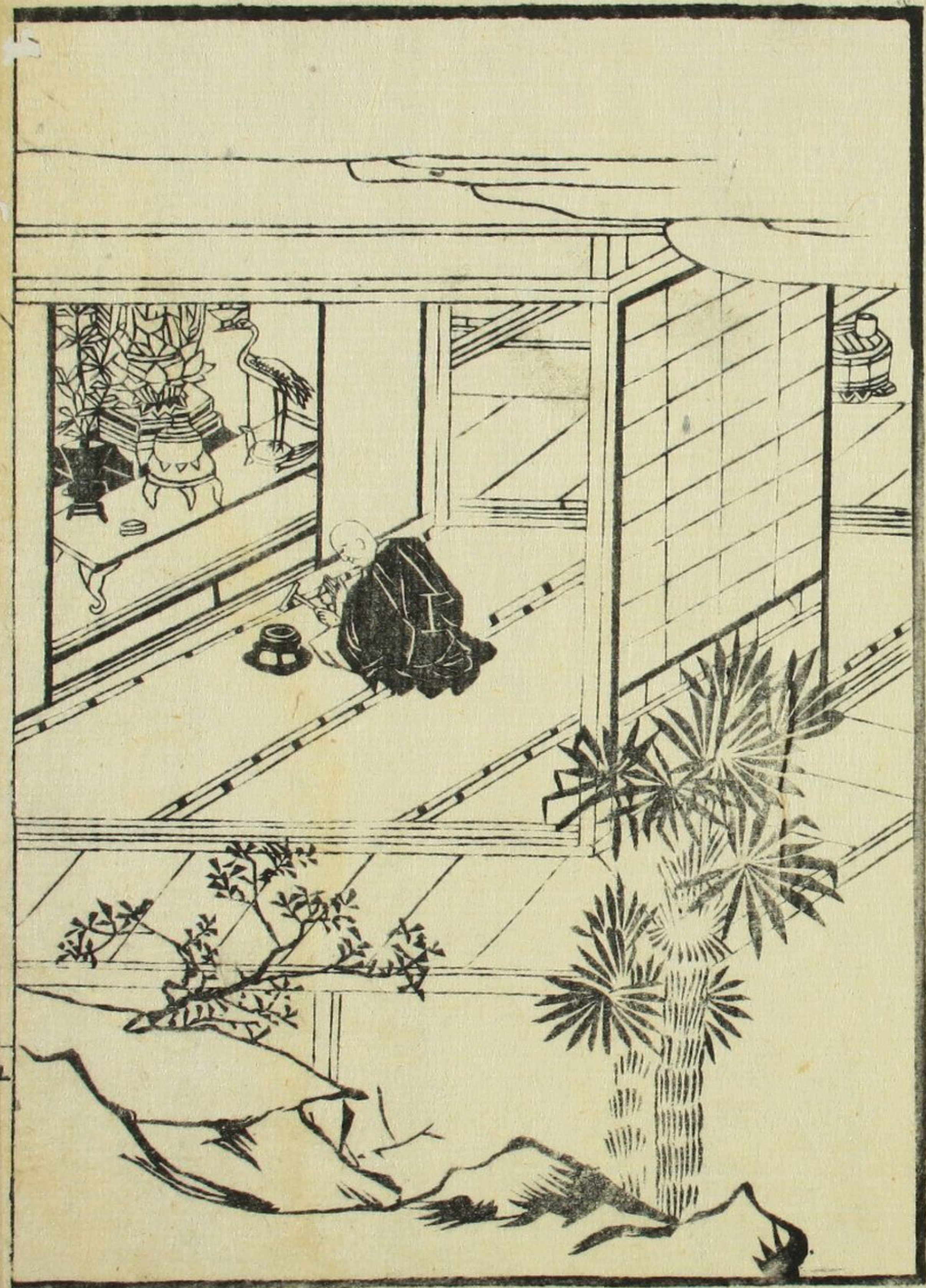
て頼り出家此本意をも遂ど母七年此忌辰を  
 迎へまづ其遺言にのぞく四國此靈地を巡禮し  
 其年終ふ同國喜多郡大洲加藤遠江守殿大乗山  
 壽榮寺ト入高譽上人を師と剃髮深衣して  
 安西と号す此時四十歳實了是惑さる人なり



此の時安西師あんせいしのむのひのう様乃身ともなり候いまの今  
 一々の四國しこくをめぐり。され功德くどくをものほまづやと存ぞん  
 より候いまのうさうひたるをさうのふ。師しのうとくされば  
 行脚ぎやうかくをいふもよりて其利益りやくあるまきなれども僧そうの  
 きあふん。行脚ぎやうかくの事こと籠かごり居いる。念佛ねんぶつをいふ其功こう  
 勝かちを侍まへぶ。幸さいふ當寺たうじの末寺まつじ中村なかつむら乃亦また誓寺せいじ願王がんおう  
 山さん破壊ええ乃地ちたる。今任職いまぢやくの人ひとをいふ。僧そう彼かふ  
 任持ぢんぢして閑あひらり念佛ねんぶつをいふ。上かみもたき功德くどくなる

之終に附屬乃人となる。其成るる寺はありのやう  
し心をすゆと朝も夕もなすは在俗のむじを悔し  
懃懃懃悔れ悔れ悔れ念佛乃外他事なするを  
實道心乃内充まば外助も入ありて  
たう。阿まう御堂も雨露乃とぬの  
くも修覆して本尊をあらわす  
とあり。光をぬきわす  
寺とまなりぬ。と此安置の本尊。慈覺大師の

御作より三尺餘り乃弥陀如来威靈不思議の尊容  
ひりり種々の靈驗世もつとあり  
安西の靈尊に隨侍恭敬の住持なりも元  
来一文不通の身はくたはるる經陀羅尼とて  
其平生の勤行は何時何乃つとあり  
業たうと拵く不啻也ひ出きし佛前  
に念佛とぞ隨自意の法をえられ檀中の  
人くも是をて思ふと先亡乃法名なり



告来り。廻向して給へり。我をこそよりの文盲  
 けり。文字乃心もわのふれゆへ。あたまる法名を  
 わげあると成り。幸ふ其人を。俗名は知れ  
 程。それ唱へて廻向せん。為し勤る念佛は  
 ありは。俯して。何空門。何兵衛。何信女。平  
 と色く聞をも。恥ぢ。回向する。思ひ入。我實は。すじ  
 うね世のそえもたのま。き。行者なりと。感下  
 りひまる。

志の乃をなす。よれつ子の時所をもえくけはく。  
南無阿弥陀佛助給ト口癖ト。入る念佛  
乃行者ト。自他宗ト知識ト逢ト三拜ト以  
常の事ト。心ト海ト。をのけ。恭敬  
修乃具ト。方ト。ぬ

寶永六年トの三月中旬ト。壽榮寺ト。光譽上人ト。  
大蓮寺の誓ト。誓ト。上入ト。利ト。億ト。其外ト。法ト。類ト。有ト。縁ト。乃ト。檀ト。越ト。  
某等ト。を招ト。子ト。何ト。るト。寺ト。人ト。ありト。をト。くト。饗ト。食ト。應ト。

きれも程ト。思ト。ひト。子ト。細ト。りト。をト。  
く問ト。ふト。項ト。日ト。始ト。のト。靈ト。夢ト。をト。感ト。ずト。ゆト。  
其ト。もト。びト。ふト。きト。ひト。先ト。各ト。にト。饗ト。食ト。應ト。其ト。上ト。  
はく語ト。りト。侍ト。らんト。をト。めト。りト。をト。いト。はく。相ト。をト。いト。はく。夢ト。とト。問ト。  
わく。うト。づト。たト。語ト。りト。きト。とト。あト。るト。此ト。後ト。一ト。夜ト。當ト。寺ト。のト。  
如ト。来ト。やト。安ト。西ト。くト。をト。驚ト。しト。ゆト。何ト。とト。汝ト。とト。  
したやいふと。仰ト。りト。れト。つト。らト。我ト。終ト。日ト。御ト。念ト。佛ト。をト。友ト。  
して居ト。りト。候ト。はト。ちト。びト。者ト。もト。候ト。とト。申ト。すト。

又のいほりく。汝婆婆みは退屈きやと我時ふも  
くも今年七十歳ふたりのぬま六退屈たうまふも候  
りず。しりごとく急ふ極樂へ参り度く後もなりと  
ありやうよりあぐれだ。あうるまぞ。ゆごみぬ方の事  
みくあれは實は急ふ願ふ心の發まうらび。汝今我  
り隨ひ来まうと。あうとけたるも弥陀如来我手代  
取く引立まを給ふと思つ世り金の砵子と中ん  
つる物を時くるやうに光のめやきる地に至る進ぐ

如未導もふり。其御後姿を見そやとこれゆ  
袂を志のり思と決み手代合を御供とまき四方  
をみるふ色くこれ木立あり此方乃木と違りてあひく  
く珠れやう也又大成池もあり其廻金ををりつと持  
し物と見ゆ池に見事れ蓮あり花の中より童  
子れ座きりこくに橋あり佛は付く是を渡まは  
右や左に見馴ぬ鳥れ遊び居るの其うらり  
婆婆みは似ふはまもなり。あうりく行く廣き御



堂の世ふのしるかれ所をみるふ月日ひもりぬ先の  
まだゆれするふろく輝く其數あるぬ佛菩薩  
あり其時此有難うあが娑婆を忘まて此まあ  
有ししを申あげあふひばくと問奉まと思ふ汝願  
所の極樂とつるあ也と目を留く先此度の歸ま  
實入来る期あり疾来らんと思ふぞあふ我名を稱へ  
忘ましび先づくと仰をけく付従ふを思ふ  
ぞく此寺の内へ歸りく自みま此身なご

高座へ登り貴賤群集乃中みく説法まると  
みまうも夢あを候也と猶今更いたあ  
涙み咽び語る所聞し其相のゆも曼陀羅乃  
變相違事なり誠し希有れ感見と一座  
をのく隨喜の袖をまがぬひり



其後ハ御告を得ク浄土此相を拜ヒ度クせんバ  
欣求乃心頻リナリク。同年十月朔日。本尊入宮。  
今ハすまゝに忝ク人と思ハ外ナリ。片時も早ク  
迎へ給フ。心中ノ願を發ス。又の日二日夜入ク  
念佛ス。五更及ク。本尊告ク。汝往生  
此期を知らんと思フ。未年寅乃三月十五日己午乃  
間。病患をぬク。守浄土人む之んぞ。敢ク  
疑フ。分明夢の告あり。す。山

同四日とつふ。壽榮寺行。あ。御示現あり  
と。往生此期を語り出。壽榮寺及び城下乃  
人。直リ聞傳。聞。敢。これを信。何事を  
ソ。お。嘲り笑。族もあれど。安西。氣色も  
ぬ。益佛乃悲願を仰ぎ。寒冷。汗を催。そ。ゆ  
え。念仏。諸人の疑いを。程の  
御示現あり。切。祈。同年十二月  
晦日。通夜念佛。中。本尊例の

御聲ごこゑもく。汝なんぢ来きた年とし三月十五日巳午しご此こゝ中間時ちゆうかんじ日ひ  
つづき。いよく迎むかへん諸人しよじんの聞きく疑うたがうも汝なんぢの信しんを  
堅かめせよ。無なく期きを示し。大だい往生じやうじやうをみろ。いむるを  
諸人しよじん。念ねん仏ぶつを勸まめん為ためぞ今いまとやうに疑うたがひも  
往むか生うとふも志こころ不なきなをのび。散さんぶまきせ。い  
とに乃な為ためうく。何なにもば。今いま夜やの告つも。遠とほ慮りなぐ。今  
了り。語ことりをいふ。御ご告つげえ。明あく。寅とらの元もと旦だ  
先ま大だい蓮れん寺じ。誓ちか言ごん誓ちか言ごん上じやう人にんの許ゆる入い行ぎやう。いま。年とし始はじの祝いわい

詞ことばをさした。いもたつ。び。我われう終はつ。されあ。り。昨け  
夜や乃な告つも。いよく語ことり。そ。れ。も。ら。い。城ぢやう下げ小せう出し家かく  
み入い我われの安あん西せいといふ者ものなる。来きた三月十五日日中じちゆうみ  
本ほん誓ちか言ごん寺じに。大だい往むか生うを遂とる。乃なり。各おのも念ねん仏ぶつ。そ  
ら。や。う。給たまへ。我われを。う。あ。や。う。物ものぞ。い。ま。さ。き  
み。く。觸ふれ。ぬ。あ。あ。さ。う。ぐ。年としの始はじ。い。れ  
と。さ。そ。考かんがへ。あ。あ。い。狂きやう乱らん。や。と。海うみ汰た。い。ひ。り。  
さ。れ。も。安あん西せい心しんを。変かへ。同どう月げつ五ご日にち。親おん友ゆう乃な許ゆる入い行ぎやう。無なく

葬送の具なきを計る。是を聞人よりその付  
きくるやんといひやうあり

同三月三日安西誓言誓上人の許み参り申侍りし  
我往生も最早程あり。先づたく本意を遂候り  
其上あり。二夜三日に別時念佛を興行あり。説  
法乃ちあり。我往生乃始末を語り一時に諸人の  
疑をとりけ。念仏の信を励し給ふも又如來の御告  
私の所存にあはべ。則件の別時料并僧衆の施物

等をも用意しぬ。念比し語ひ去ぬ  
西其は乃四五日此内袋を己が袷り頭陀き  
城下をめぐり所は家く入りに。是より来十五日  
往生を遂候り。来りて随喜あり。世に  
會席の日刻し。告る。中しに。其親  
れ生死を軽く。あり。聞え。其親  
に聞み。恐び。何事ぞ安西坊。あり。其  
し。正月乃觸流より。其沙汰

乃世りも廣く人の心も後しうぬを又  
ぞやめはるは方見さ。今迄の事は是非の  
とれどみり止む安西亦敢くしむをうびと  
教訓を加ふるふりやとよ是私乃心より好ん  
し手所よりび此よりわさく本尊夢の  
現もわ我左右の肩の上前と後より立りの給ひ  
往生此期も近付ぬ。何とてしうすうとて  
今一度期を觸く諸人の群を催せよ是汝ひり  
此

爲よとらうはあび廣く万人往生の念仏を勧めん  
そやめ打ちしは御告乃しふめ候しを  
そんをうむの佛を疑ふ程の人もなうる証  
ゆく止め



同六日の頭陀の序。誓誓上人乃許。立り今日  
 も出候。頭陀もり。あを計とり。上人西が。あふ  
 應。トてやぐく。死ぬ。き身を知。たぐ。そん。其頭陀の。  
 何の故。ぞと尋。られ。た。つ。を。ま。今。此頭陀の。我。没。後。  
 別時。の間。衆僧。に。備。用意。は。料。り。も。と。存。り。ん。バ。  
 なり。其外。何。の。れ。わ。ご。も。計。の。露。も。心。り。あ。ふ。と。れ。  
 我。今日。に。れ。わ。る。内。外。に。財。を。あ。つ。る。あ。錢。三十。張。  
 領。ど。る。れ。と。ま。本。誓。の。御。任。持。り。ま。い。は。す。と。我

たゞそれうぎふ座を打く語さる上人の感喜の  
餘り強し聞えもやび不審汝其氣色あり。往生の  
たふんやいあやうのほあれ時ふ安西師乃まあは  
某彼もさやうは仰られつものいほも諸人の上乃疑ひ  
を除ん爲るへ。二三日病をうも終りたふんあど何事  
も心乃まふなるやうぬ。尸出らる詞乃半。つやさや  
も成るま下りありや。ひまう事ひ忽よ心は浮びけ  
し打きく。とく如来の御告の何事も我に任をよ。

うがふ人乃後の爲も。つよ無病安隱に往はし。  
遣ふことなむ。御示れ事うらむ。とくあはれ  
次第と先頭陀の時も。うのま。又明日と聞え行  
ぬ。又此日来り。御告乃期も。ちのまめ。今ハ静み  
禁足し。一心り念佛して。往生伏待候り。それ  
今日ハ御暇乞よ。参りつもの。上人も隨喜なむ。  
いものなる躰よ。あむ。やう。夢中の感を  
容易よ人よ。説さる。佛祖乃深き制誡なり。



殊<sup>と</sup>夢<sup>ゆめ</sup>の虚<sup>きよ</sup>實<sup>じつ</sup>の<sup>り</sup>。汝<sup>なん</sup>漫<sup>まん</sup>の<sup>り</sup>説<sup>せつ</sup>を<sup>も</sup>の<sup>り</sup>く。人<sup>ひと</sup>  
あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>信<sup>しん</sup>ぎ<sup>び</sup>却<sup>すつ</sup>く<sup>く</sup>狂<sup>きやう</sup>乱<sup>らん</sup>乃<sup>なり</sup>つ<sup>ら</sup>を<sup>も</sup>朝<sup>あさ</sup>に<sup>も</sup>  
其<sup>その</sup>上<sup>じやう</sup>の<sup>り</sup>僧<sup>そう</sup>起<sup>き</sup>居<sup>い</sup>飲<sup>いん</sup>食<sup>じき</sup>常<sup>じやう</sup>の<sup>り</sup>異<sup>い</sup>の<sup>り</sup>事<sup>こと</sup>す。身<sup>しん</sup>躰<sup>たい</sup>  
と<sup>も</sup>あ<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>や<sup>り</sup>ふ。聊<sup>りやう</sup>乃<sup>なり</sup>病<sup>びやう</sup>苦<sup>く</sup>な<sup>ら</sup>ひ<sup>も</sup>な<sup>ん</sup>を<sup>も</sup>容<sup>りやう</sup>易<sup>い</sup>。  
往<sup>じやう</sup>生<sup>じやう</sup>を<sup>も</sup>遂<sup>すい</sup>ら<sup>ん</sup>疑<sup>ぎ</sup>く<sup>く</sup>若<sup>じやく</sup>捨<sup>しん</sup>身<sup>しん</sup>往<sup>じやう</sup>生<sup>じやう</sup>な<sup>ら</sup>ん。捨<sup>しん</sup>身<sup>しん</sup>  
も<sup>も</sup>未<sup>み</sup>世<sup>せ</sup>に<sup>も</sup>根<sup>こん</sup>機<sup>き</sup>の<sup>り</sup>堪<sup>かん</sup>ど。期<sup>き</sup>に<sup>も</sup>臨<sup>りん</sup>ん。後<sup>こう</sup>悔<sup>かい</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ば</sup>  
一<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>乃<sup>なり</sup>障<sup>じやう</sup>も<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>ぬ<sup>を</sup>故<sup>こ</sup>を<sup>も</sup>の<sup>り</sup>く<sup>く</sup>斟<sup>しん</sup>酌<sup>じやく</sup>と  
づ<sup>き</sup>所<sup>ところ</sup>ぞ。汝<sup>なん</sup>ん<sup>ん</sup>こ<sup>う</sup>ふ<sup>ふ</sup>示<sup>し</sup>給<sup>たま</sup>ふ。安<sup>あん</sup>西<sup>せい</sup>の<sup>り</sup>捨<sup>しん</sup>身<sup>しん</sup>を<sup>も</sup>

は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>き<sup>き</sup>御<sup>ご</sup>告<sup>こ</sup>の<sup>り</sup>信<sup>しん</sup>と<sup>て</sup>往<sup>じやう</sup>生<sup>じやう</sup>の<sup>り</sup>候<sup>こう</sup>なり。  
佛<sup>ぶつ</sup>の<sup>り</sup>妄<sup>まう</sup>語<sup>ご</sup>な<sup>ら</sup>ん。所<sup>ところ</sup>詮<sup>せん</sup>其<sup>その</sup>期<sup>き</sup>を<sup>も</sup>見<sup>み</sup>給<sup>たま</sup>ふ。先<sup>せん</sup>御<sup>ご</sup>  
暇<sup>じま</sup>と<sup>て</sup>作<sup>さく</sup>禮<sup>らい</sup>して<sup>も</sup>退<sup>たい</sup>り。安<sup>あん</sup>西<sup>せい</sup>過<sup>か</sup>は<sup>ら</sup>難<sup>なん</sup>波<sup>は</sup>吉<sup>きち</sup>堂<sup>だう</sup>門<sup>もん</sup>と<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>。  
人<sup>ひと</sup>乃<sup>なり</sup>許<sup>ゆる</sup>し<sup>ん</sup>行<sup>かう</sup>の<sup>り</sup>吉<sup>きち</sup>右<sup>ご</sup>門<sup>もん</sup>其<sup>その</sup>比<sup>ひ</sup>愛<sup>あい</sup>子<sup>し</sup>の<sup>り</sup>別<sup>べつ</sup>を<sup>も</sup>愁<sup>しゆ</sup>の<sup>り</sup>餘<sup>あま</sup>。  
活<sup>かつ</sup>く<sup>く</sup>甲<sup>かう</sup>斐<sup>はい</sup>交<sup>かう</sup>の<sup>り</sup>世<sup>せ</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>り</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>り</sup>生<sup>じやう</sup>害<sup>がい</sup>を<sup>も</sup>  
候<sup>こう</sup>ら<sup>ん</sup>と<sup>も</sup>存<sup>ぞん</sup>ず<sup>る</sup>な<sup>ら</sup>ん。語<sup>ご</sup>ら<sup>ん</sup>を<sup>も</sup>ら<sup>ん</sup>に。安<sup>あん</sup>西<sup>せい</sup>も<sup>も</sup>い<sup>ふ</sup>あ<sup>ら</sup>ず  
や<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>づ<sup>づ</sup>の<sup>り</sup>思<sup>し</sup>の<sup>り</sup>給<sup>たま</sup>ふ。徒<sup>た</sup>ら<sup>ん</sup>死<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>命<sup>めい</sup>を<sup>も</sup>西<sup>さい</sup>方<sup>ほう</sup>に<sup>も</sup>投<sup>な</sup>  
り<sup>し</sup>。御<sup>ご</sup>念<sup>ねん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>を<sup>も</sup>励<sup>りき</sup>め<sup>ん</sup>。我<sup>われ</sup>の<sup>り</sup>去<sup>き</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>り</sup>十<sup>じゆ</sup>月<sup>げつ</sup>に<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>尊<sup>そん</sup>り<sup>し</sup>大<sup>だい</sup>

往生の願を立ふ。寅は三月。御迎へんと時日多く  
御示し預りぬ。御方も一心念仏と。往生  
を遂らぬ。其愛子も對面あんと。示とをり。向  
後思ふ。警警上人。斟酌と。省れ給ふ捨身  
此心安西に露もなき事なき。實も單直  
仰信乃行者也。

同十日此より諸人あり。疑ひなき。本誓言  
寺小群集して念仏の聲晝夜絶む。十二日入。

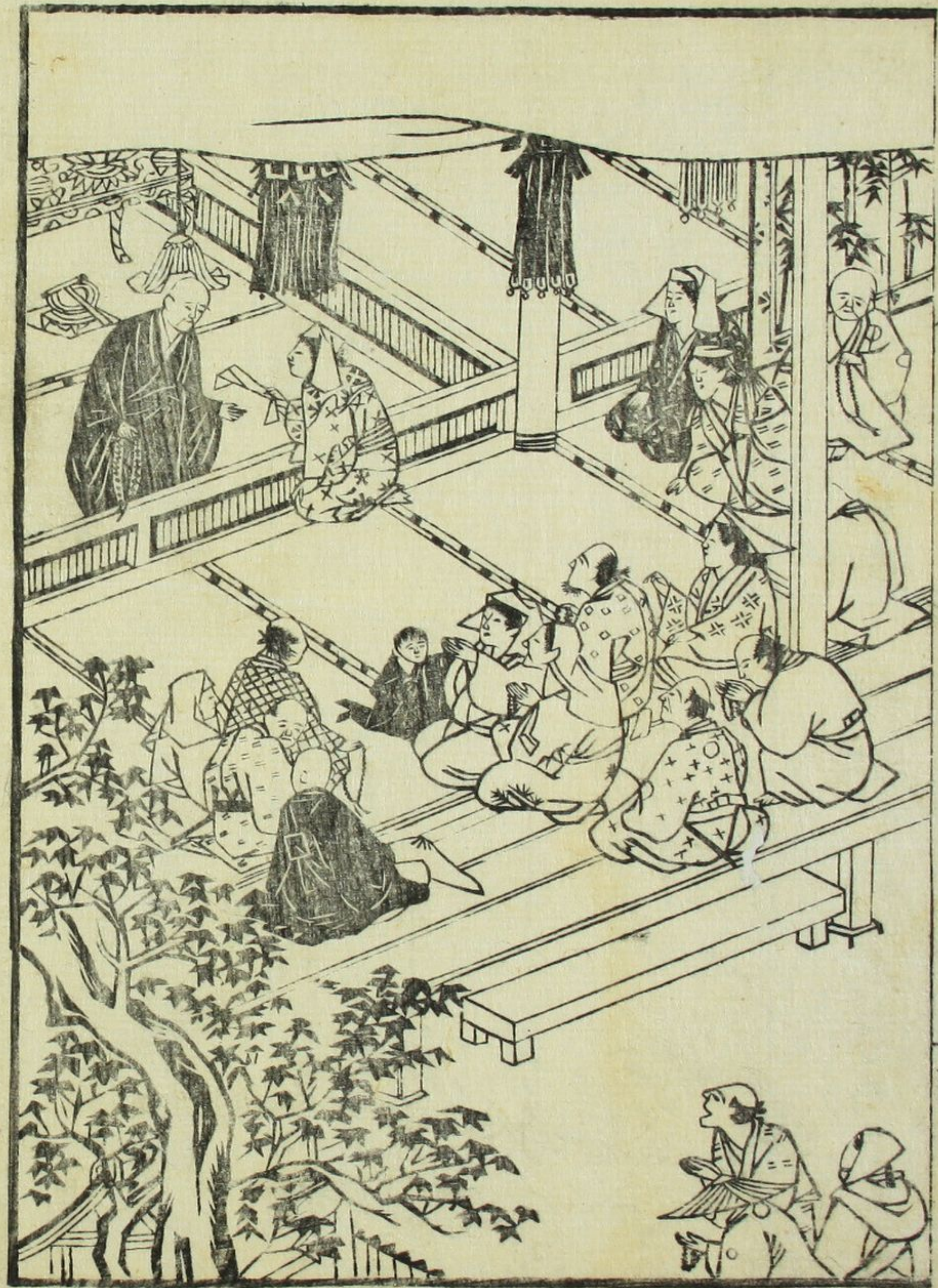
安西群集の諸人に向ひ我往生ふ。於ていづれも  
疑ひ給ふ。其故の過。六日の夜乃夢。又本  
尊現し給ひ。汝人の廢照の事も。此の誠を  
いづく念佛と。生ると。往生の事なき。御  
告を得る。のふ。其時紫雲我身に。異香  
室に充る。後。紫雲異香の勝瑞。念仏  
菩薩室内に遍満して。我を擁護し給ふの相あり  
を。見給ふ。一心念仏して我往生よ。いづり

給へ無く如来の御告りも汝一人の往生の一切念佛  
する者の往生の御告りも汝一人の往生の一切念佛  
十四日の本誓寺。例月の念佛會りて連衆殘しども泰  
りあり。安西に申す。御告り事どもを一人心の内  
信して密に往生し給ふまじき事ども  
あり。中へ漏れ給ふを以て。此の如く人も集り。  
世の取沙汰もあつて。此の如くいふに人ば  
安西聞くとその心もあつて。我の如来の御告り

一人と多き事あり。後此利益を思ふにあり。疑ふ  
や信ざるは。其の一人ありといふ。黙して去ぬ。  
其中へ。岡本治兵衛といふ人乃ち常にあり。師  
法縁をいじりて。始終安西の言を信して。師  
乃此度の往生の九慮の如く。所する疑ふ事  
子細あり。其の如く。時安西いふ。我も  
あつた人も多き。此度の往生の疑ふ事。公一  
人なり。我生前の形見り。手馴る此數珠を御方



まつとんあまをとりて念佛ねんぶつ。我われもく往生じやうじやうのま  
 再會さいかい遠とほきよあしびを契ちがひり則すなはち念珠ねんじゆをゆづるぬ



此日このひ集あつりて群集ぐんしゆの中になかに又またあそべたる事ことあり  
 ける。乃すなはちはそと人ひとともあそびあそび五十いそ余あまり乃すなはち女に性せう一人  
 多おほくは中ちゆう流りゆうををけ出でく。安西あんせい乃すなはち前まへ子こもも明日あした  
 へ極樂ごくらくへ定さだむ往生わうじやうし給たまふと聞き誠まことしめたる事こと御おん  
 事ことなり。あも候まうに御考ごかうの申まうしたる事ことなり。人ひとを  
 安西あんせい左右さうぶなりくもあつり悦よろこぶ語ご多おほく。吾われも一ひと子の  
 さあひはらう。たもとびよ都みやこにこも又またあつり。あも  
 終まりをまり候まうに悪趣あくしゆや沉ちんむ侍さむらいん。さあつる事ことの





別離此情を述む。西悦びく御眞實。今往生  
し出候。云々。とそれとも四の五つまで用  
らる。殊に此日の未明より安西に往生の結縁  
と。道俗男女袂をたはね。本誓寺に群集し  
庭もはらたをなす。充り。勿論城主より  
此度乃目付として。青野喜多右衛門。永井新藏  
代官。菊池權七。其外和田伊左衛門。鈴木金七  
岡本治兵衛。林金八等。本誓寺に入来。佛

前より列座せられた。此時乃間をいへ。善く各  
談ぶるやうに。法頼一人もなれ。其武士の衣  
良き。肩衣は折目高。腰に帯刀のれ。ら  
れ。右と左に堅める。前代未聞の法席  
希有の臨終道場なり。志るに安西。なり。氣力  
異なり。齋食の後沐浴。髪を剃。浄衣并に  
袈裟を著し。貴れぬ女姓。頼み。一色。袈  
衣囊に納り。身。隨て威儀をたはらひ。時



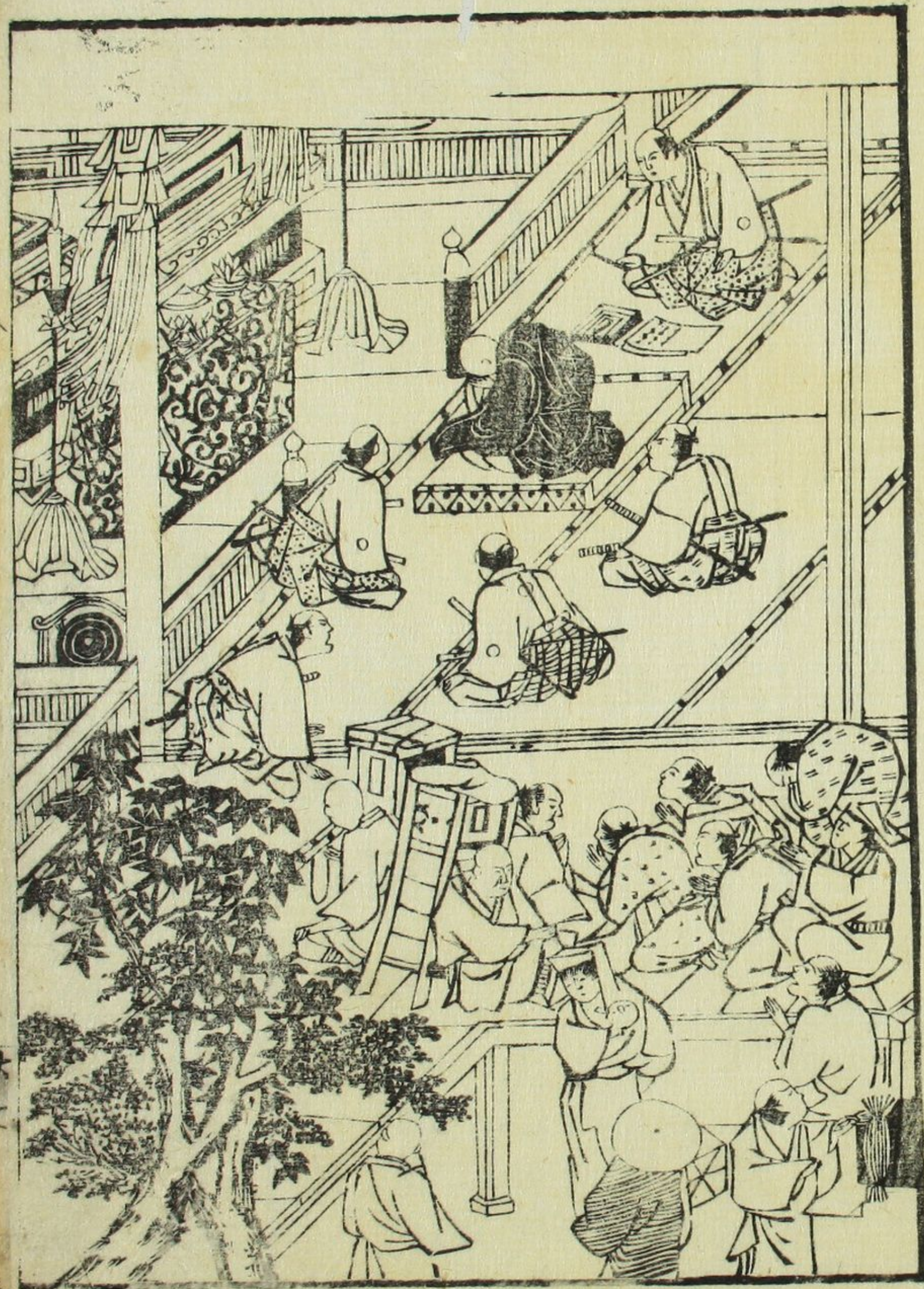
つぼみの志づゝの内よ。顔色變下。其色白く廉し。  
志く。歡喜微笑の躰なる。是をみる人。鳴をきけり。  
實往生や。給ふんと。目ひきはらふたむを。居り。  
居り。已れ上劑に到り。傍の人をも。佛前不出。  
給ひたりんや。入らば安西の。如來御告。  
乃劑限ありき。已れ中劑を待得。徐く歩。  
く出ふ。堂外のりも。也。室中。群をたひ者。  
席を諍ひ。座を論下。身を細め。膝をうづむ。

手を入らむとの間も。なまきを。すん今。御出と。  
これ敬乃詞ゆき。其平生不倍勝。思ひ道を。く。  
さぬ草れ左右。なびくふ似。り。安西。立と。  
海り春詣の四方を。是今生乃別。守念仏。  
給つ。誰くも我。往生。給ふ。し。  
かり。又立。小僕の名を。襪を持来れ。極。  
樂行け。物忘。事。御。  
な。佛敷。出。本尊の御。

前よをりて。静し焼香三禮とんば。檢使方よ筆を  
おき。志のつくと記とんりるふ。安西の服目もよび次ふ  
十方に諸佛菩薩を禮とんば記し拜とんば記し  
惣數四十一禮終りて。亦西方に三拜と。是極樂淺  
縁とて直よ報土に尊容を敬ふの意なるん。此時  
歡喜面よのめれ。身躰踊躍乃躰より立ぬ。  
や志づし諸人と共よ念佛し。とものりりて中  
席のりて。跏趺座し合掌し。独高聲よ南無

阿弥陀佛と聞ゆる事。二返し其三返り至る  
し。低しとよひて息絶ぬ。







記きん

めこれめぐたき往生乃人となはちよ実よあねを  
其日の席は相あづりく。法類勝をつつむれよ  
所のあねをぞく。皆壽榮寺よき一むろ。せまぐ  
今めう。今こくかど案内をき勢く。此よのそくを  
いつれも不審時をうつぎ。心うたがれ半日の影。漸午の  
心中よあちんとする程よ。今往生の左右を待得く各  
寺よ走りゆれ座脱自在の命終を聞。跏趺合掌の相を見

仕あふをりを安西坊是志うたう。弥陀願力の不  
可思議なりと歡喜の下にも今りの席よをり  
歎きの胸うみち。泪よ溢る悲喜もぐれせり  
おりの躰をう繪うも詞も盡し得ん物とみえび  
入棺の期を待く其遺躰を抱きとる。形を守れ  
魄の靈さくむつ運ううのめらあ厭し死相ハ  
なてあまうたうの咲の顔合掌乃座のまふ  
あを解す手びとる。ゆと併乃道のエの彫こ

得くうのむもあつふ。肉身の座像なり。いれ此人。  
供してゆふふほししをも。其遺像は膝よりすか  
りて。身をわもを歎く者あり。奇なり。安西後  
まそついのを待んとひもや。此残徳の風よあひき  
て。世にひひ慕ふりのあり。感として信を發を人  
念して。弥陀よ飯する等。よこも月つるべし。西  
終らばひらふ臨んをのびの古衣幾縷よ切を  
志く。結縁りまぐらなご。いひのさしを。あつに

聞うゝに聞と望む者。實よ貴とわの賤とまけ  
を度。須臾うして施し盡ぬ思ふよ。香光莊嚴の  
念仏り。薰じ未ぬる衣の功德なれば。うらぐら。  
其わづらも。近く敷遠く傳く。一國うみち四國  
り。溢れ人の鳴せしむも。利益は大有事あり  
此安西よ。誇く未ぬる。弥陀乃名聲をうれば  
かり。實あり。うらむ事よあひびや。是れ聞え  
を思ふよ。ひらひ。讚校は源太夫。西方乃一路を





行狀志づく人口乃とけり。世に絶ぐん事は  
量るふ。義玉を櫃よとくもくもくせん。りく世乃  
實やと思つ。粗其あり。拾記く。廣く梓よとを  
ふれも。得く念佛に座右よ。並ば其淨業の助  
縁。く。又是展轉隨喜功德乃。一のも成ぬ  
へきをり

跋

安西法師脫白。因由臨末。祥瑞豫州大  
蓮前任誓譽上人。之所親覩也。復慮無  
以傳後世。而特來獅子谷。告吾先師。忍  
老和尚先師。感喜坐脫自在。欲為其記。  
疾而未果。垂滅度時。乃囑門人龍河。記  
焉。河隨聞隨錄。用其國字者。欲俾男女

輩易讀易解易起往生之信根也記成  
需證予不揣顛蒙僭書卷尾請覽者以  
其語近莫致輕謗則箇々與西法師携  
手於蓮池上斷不可疑矣云

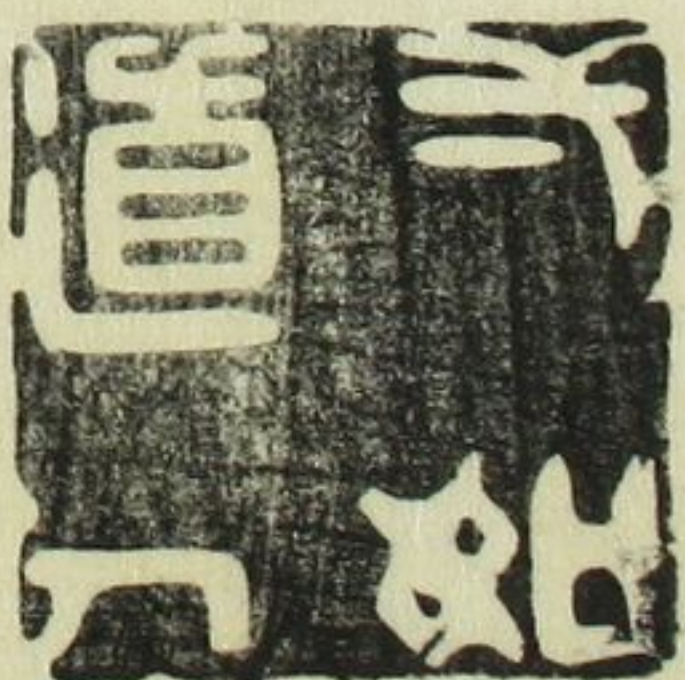
正德壬辰三月望日沙門覽光識于

雒東獅子谷白蓮別坊

這傳也顯佛願不思議於末運  
鈍漢遂往生一大事於檢使目  
前泉淨業者流之左券也第  
憾其板以遠在西國東方士庶  
未知有此奇蹟者許多矣因今

茲天保十一庚子夏六月更鑿于  
梓以授同志

嘉永元申年初夏再刻



三緣山西溪竹叢軒藏板

明治十二年

年十二月廿日

